

「自己肯定」とは、「生きているという証を見ること」かな？

長年障害児問題に係わり、今は少し緩和ケア問題にも係わる中で、「障害の受容」とか、「難病の受容」とかのドローターやキューブラー・ロスの心理過程の説明について、最近、不十分さを感じている。

キューブラー・ロスとて自身の晩年では受容には戸惑いがあったようであり、そのことについては以前に当 HP で触れたことがある（「雑学 BN」の「マスコミ等コメント関係（I）」P、2004.12.26.「キューブラー・ロスの晩年に、思いを馳せて…」：参照）。

自分は、受容へのステージを段々あがるような心理過程ではなく、それぞれのステージのような心理層が常に重層しているのでないかと思ひ、自分なりに模式図を試作したことがある（「雑学 BN」の「レポート関係」P、2004. 6. 16. 「受容への過程・仮説模式図－試作－」：参照）。

私のこの推察を裏付けるように、あるメル友の母親からのメールに、次のような一文があった。

【 親としての本音で言うと「受容」という言葉が気に入らない。なんか、腹立たしい。「障害の受容」で完結？そうじゃないと思います。
親は「受容」しなくちゃだめだとか、それがあるべき姿だとか、きれいごとでしょう。

私自身、否認と受容、悲しみと怒り、を繰り返しています。外見的には適応・再起のステージに立ってはいても。人は単純じゃないし、社会生活も複雑だから。子どもと私だけの世界じゃない。……………。

私は、『障害の受容』という言葉には反感を覚えるけれど、『自己肯定』という言葉は好きです。

私がこんな状況でも何かをしたいと思うのは、子どもを生む前から自己肯定ができていたからだと思うんです。……………。】

確かに、以前に当 HP に掲載した3人の幼い子どもを残してガンで亡くなった母親（「雑学 BN」の「緩和ケア関係」P、2005. 2. 1. 「あるご家族の日頃の心情に、『命の輝き』をかいま見る思いがする」：参照）も、「自己肯定」ができていたのかも知れませんね。

「自己肯定」とは、自分の試作模式図上の言葉でいえば、「人間として生きているという証を見ることができること」なのかなと思う。

これは何も障害や難病の有無に拘わらず、人はみんなそれぞれの事情を抱えて生きているのだから、全ての人に共有する「人間として自身の生に向き合う日々の営み」かと思う。

さて、自分の意図が分かり易い模式図に改訂したいが、自分の PC での作図能力では…。誰か PC 作図を手伝ってくださあ〜い！

（2006年2月5日 記）